

東亜同文書院教授鈴木沢郎の満州国調査旅行

森 久 男

I 解 題

上海に本拠を置く東亜同文書院（1939年に専門学校から大学に昇格）は、学生が卒業年次の夏に中国各地で現地調査を実施したことで有名である。事前に定められた地点での調査後、学生達はさらに一カ月余にわたって中国各地を旅行して見聞を広めた。調査旅行の終了後、学生達は「大旅行日誌」「現地調査報告書」、および調査の過程で入手した資料を学校に提出した。これらの調査資料は戦前期の中国研究のための貴重な資料の宝庫になっている。

書院の学生が書いた「大旅行日誌」「現地調査報告書」はすでに高い評価が与えられているが、教員が執筆した「研究旅行日誌」「研究旅行報告書」の存在はあまり知られていないので、ここでは、後者の具体的事例として、1937年夏に鈴木沢郎教授が書き残した「研究旅行日誌」「研究旅行報告書」を紹介しよう。鈴木は愛知大学編『中日大辞典』の編集者として有名であるが、同文書院の教授時代に中国語教育を担当し、言語学に造詣が深かったので、「満州国に於ける国語政策について」というテーマで研究旅行を実施している。

鈴木は蘆溝橋事件直後に北平へ赴き、歴史的瞬間に現地の混乱した状況を目撃することになった。7月3日、鈴木は上海駅を出発し、6日に天津に着いた。8日朝、新聞で蘆溝橋事件の勃発を知り、同日列車で天津から

北平に向かった。同日の「日誌」は、「車中急遽出動スル天津駐屯軍一小部隊ト同車シ、始メテ事態ノ重大化シ居ルヲ知ル」と記している。北平滞在中、鈴木は事変直後の日本軍、大使館、北平在留邦人の緊迫した情況を目撃し、12日の「日誌」に居留民会が「大使館内へ籠城準備ノタメ糧食ヲ搬入シツツアリ」と綴っている。鈴木は、北平から承德行きのバスで満州国に入る予定であったが、交通途絶のために予定を変更して、12日に京奉線で天津に向かい、13日に天津から山海関經由で満州国錦州に入り、14日に承德に着いた。

鈴木は15日に承德の教育庁で熱河省内の教育状況を聴取して、16日に大連へ飛び、17日に大連高商を訪問したが、同日夜に腹痛を起こし、18日に入院した。書院と連絡を取った鈴木は、28日に大連を発って上海に戻る予定であったが、24日に同文書院教頭代理馬場楯太郎教授からの連絡により旅行を継続することにした。鈴木は28日に退院し、29日に奉天に到着して市街の発展振りを参観し、30日に新京へ移動して、31日に國務院等で調査研究をした。鈴木は8月2日に白城子へ行き、3日にチチハル、4日に北安、5日にハルピン、8日に牡丹江へ移動したが、同地で腹痛が再発して数日間静養した。

蘆溝橋事件後、戦火は上海に飛び火して第二次上海事変が勃発した。8月11日、鈴木は朝鮮清津に着き、12日に元山へ移動して、13日朝の新聞で上海の緊張した空気を知った。同日、鈴木は元山から京城を経由して深夜に釜山行き列車に乗り、14日朝の新聞で「上海ニテモ日支両軍既ニ砲火ヲ交ヘツツアル」ことを知った。同日昼、鈴木は関釜連絡船で釜山から下関に向かい、下関発の夜行列車に乗って、15日深夜に横浜に到着した。16日、鈴木は東京の東亜同文会に出頭した。ここで、鈴木は「コノ時局ハ相当長引ビキ、到底内地開校ノ已ムナキニ至ル」ことを知って、上海へ戻ることを断念して滞京を決意した。

上海事変が勃発するや、8月15日に上海東亜同文書院徐家匯校舎は中国側に接収された。22日、臨時教授会は四年生の志望者の通訳従軍を決定

し、23日に書院は全学生と教職員に内地待機を命じた。10月18日、書院は長崎仮校舎で教育を開始した。11月3日、徐家匯校舎は放火によって焼失した。

研究旅行後、鈴木は「満洲国に於ける国語政策に就いて」と題する研究旅行報告書を纏めた。植民地教育問題は民族矛盾を集中的に体现し、とくに言語政策は異民族支配の重要な手段である。日本の植民地支配は、伝統的に同化主義を強く志向している。当時、台湾・韓国では創氏改姓、日本語使用が強力に推進されており、歴史の浅い植民地満州国の言語政策が焦点となっていた。

満洲国には漢族・満洲族・蒙古族・朝鮮族が雑居し、さらに日本人・白系ロシア人等の外来者が入り込んでいた。満州国の「五族協和」のスローガンは、複数民族をいかに支配するかという問題を内在しており、言語政策の面では、現地住民が使用する漢語・蒙古語・ロシア語と日本語を併用して公文書が作成されていた。当時、満州国では「国語」を統一するため、共通語・公用語として何語を用いるかが言語政策上の重要な課題となっており、指導民族である日本人が使用する日本語を「国語」とする見解が台頭していた。

満州国の国語政策の決定に当たって、現地語を尊重する見解と急進的な日本語普及を謀る見解が存在していた。鈴木は、満州国の共通語として日本語を普及すべきであるという政策理念を共有していたが、摩擦の多い急進的な日本語普及政策に反対し、時間をかけて漸進的に日本語を普及し、共通語としての地位を獲得すべきであると主張している。

蘆溝橋事件は日中戦争の発端となり、日本は植民地帝国瓦解への道を辿った。蘆溝橋事件直後に北平へ行き、さらに満州国を訪問した鈴木は、重要な歴史的事件を目撃しながら、日本の満州国支配が根本的に揺らいでいる状況を認識することはできなかった。鈴木は、急進的な日本語普及政策を否定し、穏健な立場から満州国の国語政策を提言しているが、そのような認識は、満州国が長期間存続することを前提としてはじめて成立する

ものであった。上海事変の結果、書院の学生・教師・職員が全員が上海から引き揚げるという状況下で、鈴木はなお満州国の長期的な国語政策の将来を構想していたのである。

Ⅱ 鈴木沢郎「研究旅行日誌」（昭和十二年七月）

七月三日（土）

早朝靖亜神社ニ参拝。午前八時〔上海〕北站ヨリ首都特快ニテ出発、十二時四十五分南京着。大使館ヲ訪問、清水通訳官宅ニ一泊。

七月四日（日）

午前中大使館自動車ヲ拝借シテ、林哲夫教授ト同道各名勝旧跡及ビ市中見学。午後四時浦口発津浦線ニテ済南ヘ向フ。

七月五日（月）

午前十時半済南着。大明湖、齐鲁大学見学。午後八時十八分発平滬通車ニテ天津ヘ向フ。

七月六日（火）

午前七時五分天津東站着。中日学院、満鉄事務所訪問。夜同窓会有志歓迎会ニ招カル、出席同窓約三十名。

七月七日（水）

天津日本商業学校参観。総領事館ヲ訪問シ、堀内総領事、永井副領事ニ面晤ス。

七月八日（木）

新聞ニテ蘆溝橋事件ノ勃発ヲ知ル。午前九時三十分発急行ニテ北平ニ向

フ。車中急遽出動する天津駐屯軍一小部隊ト同車シ、始メテ事態ノ重大化シ居ルヲ知ル。沿道各駅ニ於テモ伝書鳩ヲ携帯セル日本憲兵ノ緊張警戒シ居ルヲ見ル。午後零時北平着。直チニ大使館ヲ訪問シタルニ頗ル緊張シ居リ面会モ不能ナリ。偶々小竹〔文夫〕教授に遇フ。支那人旅館中央飯店ニ入ル。本日午後八時ヨリ市内ニ戒厳令布カル。

七月九日（金）

大使館訪問、ココモ警備ハ今朝ニ至リテ頗ル厳ナリ。同仁医院ニ入院中ノ道下、磯貝両学生ヲ見舞フ。中日実業公司平野銀治氏訪問。午後西城ニ日本鉱業会社竹田四郎氏訪問。戒厳ノタメ帰途七八回ノ誰何ヲ受ケ、一時間余ヲ費シテ寄宿ス。十一時頃近クノ大毎支局ニ至リテ三池特派員ヲ訪ヒ、情報ヲキク。

七月十日（土）

各城門閉鎖サレ、通州行鉄道モ不通ナルヲ以ッテ予定ノ通州訪問ハ事態ノ推移ヲ見ルコトトス。小竹教授ト故宫博物館見学ニ出掛ケタルモ門ヲ鎖シテ休館中ナリ。地安門外ニ至リ骨董ヲ見ル。地安門ハ軍警ノ警戒厳重ナルモ交通ハ自由ナリ。明日承徳行バス運行ノ予定ナルモ果シテ古北口マデ行キ得ルヤ否ヤ氣ヅカハシキ旨観光局ヨリ返事アリ。

七月十一日（日）

小竹教授ヨリ電報アリ、前線ノ模様悪化ノ趣通報アリ。承徳行バスハ城門開カレザルタメ引返シタル由ナリ。

西田耕一氏を訪問シテ会ハズ、同仁医院ヘ学生ヲ見舞フ。

城外トノ交通全ク杜絶シ居リタルトコロ、鉄道ニヨレバ西直門站発、豊台乗替ニテ天津行ノ便アリトノコトナレド、豊台ニテノ連絡如何ハ不明ナリト。本日ニ至リテハ予定ノ通州行、承徳行ハ之ヲ断念シ、便ヲ得テ天津ニ引返シ錦州經由承徳ニ入ルコトニ決心ス。大阪朝日特派員園田次郎氏ヲ訪

間。折シモ武官室ヨリ「本日午後一時半、我軍ハ原駐屯地ニ帰還ス」トノ
発表アリ、事態ノ好転ヲ思ハシム。

七月十二日（月）

居留民会ハ連日籠城ニ関スル協議ヲナシツツアリ、大使館内へ籠城準備ノ
タメ糧食ヲ搬入シツツアリ、大使館ノ警戒モ愈々厳ニシテ空気大イニ緊張
シ来ル。

午後四時小竹教授ト共ニ天津行列車ニテ出発、午後六時無事天津着。皇軍
統陸天津ニ入ル。

七月十三日（火）

午後零時五十分天津発、午後八時山海関ニ入ル。満洲国側ハ灯火管制中
ナリ。支那人入国検査嚴重ナリ。満洲国警務団検査員ノ態度ハ改善ノ要ア
リト感ズ。午後二時半灯火管制列車ニテ錦州着。

七月十四日（水）

七時半起床。八時發承德行列車ニ乗ル。午後七時承德着。国境近キコノ都
会ニ於ケル灯火管制ハ真剣味アリ、且ツ軍事輸送活発ニシテ戦時気分横溢
ス。

七月十五日（木）

教育庁ニ日田次郎氏ヲ訪問セルモ出張中ニテ不在ナリシタメ、日系督学官
ヨリ省内教育状況ヲ聴取ス。更ニ中央銀行鈴木丹司氏、日本基督教会福井
次郎氏、大満公司北原唯二郎氏、松浦領事代理ヲ歴訪ス。

熱河離宮ハ軍事関係ニテ拝観禁止中ノトコロ松浦領事代理ノ斡旋ニテ之ヲ
許可サル。更ニ炎熱ノ裡ヲ腕車ヲ駆ツテ喇嘛寺ヲ參觀ス。

午後六時同窓会歓迎会ニ招カル。本日ノ温度三十度。

七月十六日（金）

福井氏朝ヨリ来訪。九時四十分飛行機ニテ承德発、十一時十五分錦県着。鉄路局警務科長永渕良二氏ヲ訪ヒ、協和会福田清氏ト駅ニテ面会ス。零時五十五分錦県発列車ニテ営口經由大連ニ向フ。午後十時四十分大連着。

七月十七日（土）

豊年製油会社小沢清次氏ヲ訪ヒ、更ニ満鉄参事中等専門学校教育係主任兼視学秋山真造氏、民政署学務課良川栄作氏ヲ訪問シ、満鉄関係学事、民政署所轄学事情況ヲ聴取ス。午後大連高商ヲ訪ヒ校長松村行藏氏、華語担任小川教授ニ面晤ス。本校ハ関東軍司令官管轄ニ属スルヲ以テ軍部ノ後援保護厚ク、且ツ大連市民ノ関心亦大ナルヲ以テ経営並ニ就職関係ニ於テ極メテ樂觀スルニ足り、支那語ニ於テモ同文書院ニ劣ラザル様ナス自信アリト豪語ス。夜在連同期生数氏ニ招カル。

七月十八日（日）

昨夜来胃部激痛アリ、医師ヲ招キ治療ヲ受ケ、午後入院ス。悪性ノモノニ非ズ、急性胃腸カタルトノコトナリ。

七月十九日（月）

療養。

七月二十日（火）

書院へ左ノ通り打電ス。

「十八日ヨリ胃痙攣ニテ入院ス。四五日後退院旅行ヲ継続シ得ル見込ナルモ、時局ニ鑑ミ如何スベキヤ御指示ヲ待ツ」

七月二十一日（水）

書院ヨリ「十日以内ニ切り上げ一応帰院セヨ」トノ返電アリ。退院次第新

京ヲ訪問シ、二十八日大連発帰院ノ予定ヲ立ツ。

七月二十二日（木）

療養。

七月二十三日（金）

療養。

七月二十四日（土）

馬場〔鉄太郎〕教授ヨリ「旅行ヲ継続セヨ」トノ電アリ。

七月二十五日（日）

療養。

七月二十六日（月）

療養。

七月二十七日（火）

療養。

七月二十八日（水）

退院。午後金州岩間徳弥氏ヲ訪問。満洲国教育並ニ国語問題ニ就キ種々御話ヲ伺フ。南山、城内、三崎山、三烈士殉難之处等ヲ見学シ、薄暮大連ニ帰着。歩行及ビ車ノ振動ノ際腹部ニ微痛アリ、疲労甚ダシ。

七月二十九日（木）

午前十時特急あじや号ニテ大連発、午後二時四十二分奉天着。自動車ニテ市中ヲ一巡ス。市街ノ急速発展特ニ鉄西区工業地区ノ発展ノ著シキヲ見

ル。

七月三十日（金）

城内ヲ一巡シテ北陵飛行場ニ至ル。午前十時発ノ筈ナリシ新京行飛行機遅延シ十一時二十五分出発、十二時四十五分新京着。夕刻マデ市内及ビ南嶺ヲ一巡ス。

七月三十一日（土）

盛京時報社ニ於テ国境特別区域旅行許可証手續ヲナス。右ハ綏芬河国境視察ノタメナリ。民生部督学官一條林治氏ヲ訪問、研究調査ニ関シ種々便宜ヲ與ヘラレ、資料ノ贈與ヲ受ク。国务院ニ山本紀綱、青木喬、大槻五郎氏ヲ訪問、満洲国ニ関スル諸般ノ調査ヲナス。国务院試写室ニ於テ情報部作製ノ満洲国紹介ノ映画ヲ見ル。

午後大同学院、鄭孝胥氏ヲ訪問ス。

八月一日（日）

本日ハ日曜日ナルヲ以テ個人的訪問ニ費ス。午後六時同窓会歓迎会ニ招カル。

八月二日（月）

午前十一時発京白線ニテ白城子ニ向フ。偶然第四学年萩原七郎ト同車ス。午後九時白城子着。

八月三日（火）

洮安県参事官第十七期大瀬戸権次郎氏来訪。同氏ノ案内ニテ白城子跡、県公署、農民道場參觀。農民道場ハ県内各地代表青年ヲ召集シ、六ヶ月間主トシテ農事ニ関スル訓練ヲナスモノトス。全生徒約三十名ニ対シ激励ノ挨拶ヲナス。午後齊々哈爾ニ向フ。午後七時十分齊々哈爾着。

八月四日（水）

龍江県公署訪問。総領事田中莊太郎氏訪問。在哈同窓ニヨッテ建立セラレタル龍江公園内同志之碑ニ参拝。午後四時四十分発北安ニ向フ。九時三十五分着。

八月五日（木）

午前八時北安発ハルビンニ向フ。天気晴朗ナレド早朝ハ稍々寒冷ヲ覚ユ。午後五時哈爾賓着。

八月六日（金）

日清製油会社ニ伊藤、高橋等同窓ヲ訪問。更ニ宗像金吾氏、溝口條七氏（ハルビン学院）、領事館ニ長岡半六氏、大久保正吉氏、小倉満氏、国際運輸松本正平氏等ヲ歴訪シ、市内見学ヲナス。夜松花江畔ニ於テ同窓会有志ノ歓迎会ニ招カル。

本市在留日本人四万ヲ越エ、日本勢力ハ絶対的の優勢ナリ。

八月七日（土）

午前九時三十分発列車ニテ牡丹江ニ向フ。午後九時五十八分着。哈爾賓ヨリ松花江ヲ下リ、佳木斯經由ニテ牡丹江ニ向フ予定ナリシトコロ、図佳線不通、飛行便モ北支事変ノタメ欠航トナリタルヲ以テ、牡丹江ヘ直行スルコトニ変更ス。出発ノ際「図佳線不通ニツキ牡丹江ヘ向フ」旨書院ヘ打電セリ。蓋シ必要ノ場合ハ牡丹江領事館宛通信ヲ得ンガタメナリ。

八月八日（日）

早朝ヨリ下痢アリ、医師ヲ招キタルニ数日間静養ヲ勸メラル。領事代理栗本秀顕氏、鉄道局原広氏ノ見舞ヲ受ク。綏芬河行ハ病氣ノタメ中止ス。

八月九日（月）

旅宿ニテ静養。下痢七八回アリ。

八月十日（火）

静養。

八月十一日（水）

疲労衰弱甚ダシキモ、本日出発、図們ニ泊ノ予定ナリ。健康コレニ堪エ得ルガ如ク感ジタルヲ以テ清津マデ乗り続クルコトス。牡丹江図們間鐵道局百々増次郎氏ト同道ス。午前十一時牡丹江発午後九時清津ニ着ク。

八月十二日（木）

午前七時半ノ列車ニテ元山ニ向フ。軍事輸送ノタメ此ノ線ニハ急行車ナシ。午後十時五十八分元山着。疲労衰弱甚ダシク且ツ歩行ノ際下腹部ニ疲労ヲ覺ユルヲ以テ金剛山登山ヲ中止ス。

八月十三日（金）

今朝ノ新聞ニテ上海ノ空氣頗ル緊張セルヲ知ル。午前十時四分元山發京城ニ向フ。午後四時三十分京城着。昨夜睡眠十分ナラズ、且ツ朝来暑氣甚ダシク甚ダ疲労ヲ覺ユ。旅館ニテ休息ノ後午後十一時發普通列車ニテ釜山ニ向フ。

八月十四日（土）

列車ハ軍事輸送ノタメ稍遅延シテ釜山着。午前十一時四十五分發閔釜連絡船ニテ下関ニ向フ。今朝ノ新聞ニテ上海ニテモ日支軍既ニ砲火ヲ交ヘツアルヲ知ル。

上海ニ歸ルベキヤ否ヤハ東京着ノ上上海ノ様子ヲキキ決スベク、一応東京ニ至ルヲ要スルモノト認メ、午後八時三十分發急行富士ニテ上京ス。

八月十五日（日）

途中静岡ニテ腹痛ヲ起シ、医師ノ手当ヲ受ケ数時間休息ノ後出発、午後十一時横浜着。

八月十六日（月）

同文会へ出頭。上海ノ事情ハ既ニ混乱ニ陥リ帰院スルモ詮ナク、コノ時局ハ相当長ビキ、到底内地開校ノ已ムナキニ至ルベキヲ以テ、コノ方面ニ努力サレタキ旨理事ノ話アリタルヲ以テ、通信可能トナリ、院長ノ指示ヲ仰ギ得ルニ至ルマデ滞京スルコトナル。

以 上

Ⅲ 鈴木枳郎「満洲国に於ける国語政策に就いて」（昭和十二年度研究旅行報告書）

一、国語の意義

人間はその本性に従って、幾十年来その社会化の段階を踏んで来た。即ち人間は自己を一層大なる社会に見出さうといふ自我実現、自我拡張の本性を持っている。而してこの本性を発揮する上に於て一番先に役立つものは言語である。故に自己の言語になるべく大きな共通力を以て、大きな社会に訴へ得ることを希ふのは総ての人間の心である。人間が一小区域内の生活に甘んじ、他との交渉を持たぬ場合には、その一小区域内の共通言語、即ち方言を駆使し得れば足れりとするものであるが、交通が開け、他との交渉を持つ場合には、自我拡張の本性によって、他との共通語を求めざるを得ないのである。例へば封建時代には他藩との交渉は極めて薄かったのであるから、他藩との共通語に対する要求は極めて微であり、従って各々孤立した方言は益々孤立特殊化の道を辿ったのであるが、現在の如く中央又は各地との接触交渉が頻繁密接になるに至っては、更に広範囲——全国——に亘る共通語の必要に迫られることは当然のことである。この共通言

語が即ち国語である。然しながら斯かる言語の存在する筈はないのであるから、他の方言との類似点を基礎として見て、最も共通点の多いものを標準とするのが普通であり、これを国語と称する。

而してかかる共通性を有する言語は首府の言語を以て第一とするのが普通であるから、首府の言語を標準国語として居る国が多い。日本、英国、仏国、スペイン、支那の如きである。但しドイツ語の如きは古のゲルマン領域の上に実ったものではなく、中世に於てドイツ人が征服した地域の上に定ったものである。而して現代ドイツ文学は東部ドイツの植民村落の中流階級に於て組織されたもので、その普及はルーテルの聖書に負ふところが大きいにしても言語そのものの共通性はその前に於て既に長くエルベ河の流域に養はれていたのである。概して言へば主として政治力によって統一したものである。イタリー語の如きは文学語によって統一されたといふことが出来る。即ちダンテ、ボッカチオ、ペトラルカ等によって建設されたイタリー高級文学は、フロレンス地方語によつてものされたものであるから、伊太利語はフロレンス語を以て統一されたのである。而して我が満州国は支那語の共通性が断然他を抜いているのではあるが、政治的關係により、教育の結果将来に於て共通性を持つべく予想される日本語によつて共通語乃至公用語たらしめんとして居るのであり、これは多大の困難と長年月とを要することを覚悟せねばならぬ。

二、一国一國語主義

「言語と思考とは同一物の表裏である。」と言はれる通り、「言語は即ち心である。」「言葉の同じ人は心も同じである」と評される心理は素朴な言ひ表はし方ではあるが、又学的にも認められることであらう。これ即ち「国語は国民連繋の最も本質的に適当なものであり、国民性格の最も生氣ある表示であり、国民共通文化の最も力強い連鎖である」と言はれる(Bluntschili)所以である。従つて近世国家主義の發達は言語の此の重要性を認め一国家一國語主義による国語の統一は各国の均しく重視するところである。

而してこれは単なる便利のためでなく民族的大同団結に至大なる関係を有するものである。

世界各国の国勢を概観するに、国民精神昂揚し、強力なる団結をなし、国力の駁々乎たる国家は総て国語の統一し居る国、又はそれに努力を惜まぬ国である。その適例はドイツであらう。中世紀に於けるドイツ語の通用範囲は極めて小なるものであった。中世紀以後に於て漸次スラヴ語の領域を蚕食し、強力を以てドイツ語の普及を謀り、その間幾多の曲折はあったが、遂に強いドイツ主義を植えつけ、強力なる国家を成したのである。米国の如き自由を尊ぶ国に於ても欧州大戦の経験により断然同化主義を採り、「One flag, One language, One nation, One heart,」の実現を期して、各民族の母語による教育を禁遏したのである。我が国に於ても新附の民に国語の普及統一を謀る所以もこれに外ならない。支那に於ても国語統一運動が民族的団結に如何に役立ったかは人の知るところである。

共通言語を求め、自我拡張を謀ることは人間の本性であるが故に、少数民族は自発的に一国家一主義の実現に合作し、国語統一による利益恩沢に浴すべき筈であるが、言語はその心であり、天性に等しいものであるだけに、実際問題としては自己の言語を犠牲とし、他に就くことは特殊の圧力を加へられる場合以外には到底行ひ得ざるところである。即ち何人と雖も自己の民族の誇を棄て、天性を枉げて他に就くを良しとしないのであり、常に他をして己に就かしめんとする大なる欲望がある。従つて何人と雖も自己の言語を推广して共通語となさんとする強力なる本性を有するが故に、標準語による国語統一は頗る重要事ではあるが、その実現には重大なる困難を克服せねばならぬこととなるのである。

一国内に数種の言語が行はれる場合には、その何れの言語を以て標準語とするも、その他の言語を使用する民族の利害と相容れず。国語政策宜しを得ざるときは、国語統一の成績を挙げ得ざるのみならず、往々にして国家の分裂を来すに至ることは世上その例に乏しくはない。欧州大戦前に於けるオーストロ・ハンガリー国内に於ける人種関係は頗る複雑で、一八四

九年には官報を以てドイツ語、イタリー語、マヂャール語等十ヶ国語を用ひることを規定しているが、ドイツ民族の勢力優勢なときはドイツ語にて統一せんとし、マヂャール民族優勢なときは或はマヂャール語を以て統一せんとし、常に紛争を続け、国家は遂に分裂せざるを得ざるに至ったのである。その他欧洲諸小国、殊にバルカン方面に於ては国家語に関する国内に於ける紛争は人種問題と密接なる関係を持って、常に紛争分裂の危機を孕んでいるのである。

言語を殊〔異?〕にする以上、人種問題は常に統一を妨げ、衝突の危機を蔵するものであるが、言語を同じくする場合は人種問題は概して重大問題化することはない。これ「言葉は心である」の理に外ならず、言語を繞つての人種乃至民族的紛争は歴史上及び現在将来に亘ってその例枚挙に遑ない程であらうが、結局するに、これらの紛争は母語以外の言語を強制する苦痛不利を除かんとする行動であつて、その強制が嚴なる場合はその苦痛不利を免れんとすれば、己れに強制を加へる他民族の強制力から離脱するより外方法はなく、茲に小民族の独立機運が醸成されることとなるのである。欧洲の少数民族が戦後強制力の弱まったのを機に民族自決主義をかざし、幾多の集合離散のあつた所以である。これを以て見るも、言語問題——人種、民族問題と大部分の場合併行する——の重大なる所以を知るのである。尚最近に於てドイツが一弾を用ひずしてオーストリーの併合を完成したるが如きはオーストリーに於ける独化主義の大成功といふべきである。而して斯かる民族主義は言語を以て先としたのである。言語勢力の優勢は人の数に於ける優勢、同化せる人心の優勢であり、従つて政治經濟上に於ける優勢となり、残るは国境の撤廢なる事務的事実だけであつたのであると解し得るものであらう。

三、満州国に於ける国語政策

数の上から見て支那語を常用する漢民族を根幹とし、来者を拒まざる五族協和を標榜し、各民族を平等に遇するを以て建国の主旨とする満州国の

国語問題は頗る複雑なる問題である。既に各民族を平等に遇する以上、その言語に対しても平等なる待遇を與ふべきは勿論にして、或一民族の言語を以て他民族に強制することは、建国の精神に悖るものと言はねばならぬ。然しながらこれ等諸民族の言語——日本語、支那語、朝鮮語、蒙古語、ロシア語——に絶対自由を與ふるときは、国務執行上重大なる不便支障を來すべきことは勿論であるが、結局に於ては各民族は各々その民族語を他民族にまで押し拡げ、これが使用を強制せんとするに至ることは必至の趨勢で、ひいては国家の不統一、国民精神の分散萎靡を來し、国家を常に不安と紛乱の裡に置き、甚だしきは国家の分裂を來すに至ることは過去及び現在の複国語制を採る歐洲諸国にその例少なからざるところである。例へば獨逸、仏國、伊の三ヶ国を平等に国語として居る瑞西、フラーマン語とワロン語とを併用するベルギー、国内に十ヶ国語が行はれて居った歐洲大戰前のオーストロ・ハンガリー、国内に英語とアイルランド語の用ひられている英國の如きは、何れも国務遂行上の大なる不便と各民族の国語を繞りての政治問題の紛起等は、以て満洲国国語政策上の前車の轍として大なる戒心を要するところである。

満洲国の枢要なる文教方面の機務に參劃せることある或人の意見としては「数千年の歴史を有する支那語を日本語を以て同化することは到底不可能である。人或は言ふ。言葉は意思を疎通し、感情を柔げ、平和円満を招來すと。然し事實は全くその反対である。何となれば日本語を得意に操る支那人は概して輕薄にして、日本道德、日本文化を理解せず、日本人に非ず、支那人に非ず、頗る變態的の人間となる。平和は言語の問題ではない。理解と同情とである。理解と同情とは輕薄者には期待し得ない」と。

筆者もこの人の意見については同感の点多々あるのである。殊に数年前關東州の公學堂を參觀した際には公學堂教育は全くの同化教育であつたが、斯くして教育された關東州に於ける支那人は日本人として立つには勿論同化の程度低く、支那人として立つには支那の教養足らず、日支何れの方面に向ふも一人前として立ち難く、實際に於て彼等の生活範圍は狹隘な

る関東州内のみに限らるるものにあらず。必ずや純然たる支那に等しき当時の満洲及び北支方面を彼等の活動範囲としなければならぬ。かかる地位に在る関東州内支那人を非支那人とすることは彼等の怨を買ふものであるとの感を抱いたことであつたが、満洲事変以後、況んや今次日支事変以後に於ける満洲国人（関東州内居住支那人を含め）に対する教育特に国語教育に関しては自ら議論の根柢を異にするものである。即ち現在に於ては最早前述の関東州公学堂教育に対する不満は之を訂正し、又前述の或人の満洲人に対する日本語強制不可の意見にも賛意を表することの出来ざるは勿論の事である。

或人の言ふが如く日本語教育の支那人に於ける好ましからざる結果あることは事実ではあらうが、それは弊害の一面であり、これを以て日本語教育を全般的に非難するは寧ろ暴論と言はねばならぬ。又然らずとすれば、それは日本文化の理解吸収に重点を置かず、目前の応用のみに重きを置いた近視眼的教育の齎らした好ましからざる結果であつて、この種教育の缺陷を指摘したものといふことが出来るであらう。然らばそれは教育の改善によつて矯正すべきものであつて、羹に懲りて膾を吹くの愚をなすべきではない。況んや満洲国建設の由来、満洲国の日本依存関係、殊に支那事変後に於ける東亜の趨勢より見るときは、前述の如き悲観的意見は放棄せられねばならぬ。宜しく満洲国内（今後は支那各地にも）に日本語を普及して日本文化を理解せしめ、日本を信頼せしめ、日本と真に協力するの精神を養成せねばならぬ。「言葉は心である」。同じ言語を語る者は思想、感情、風俗等に融和を来すこと容易で、同一国語を語る異民族は、異なる国語を語る同民族よりは更に融和するものであることも歴史の証明するところである。例へば日本に移住せる多数の異民族が、今尚各々固有の言語を用いて居つたと仮定すれば、日本精神の大同団結は期せられなかつたであらう。又支那に於ける満洲民族は現在と言語及び風俗習慣までも全く漢民族に同化してしまつて居るが故に既に満洲民族たるの意識は全く之を喪失〔して〕しまつてゐる。然るに蒙古民族は支那に君臨すること比較的短年月で、

漢民族に同化されるに至らず、固有の言語を保持し、固有の領土の一部を保持しているため、その民族意識は今尚熾烈なるものがある。若し彼等にして固有の言語を喪失して居たならば、既にその民族をも喪滅して居たことであらう。又例をユダヤ人に取れば、彼等は一の言語を有せず、国土を有して居らぬから、その勢力はその雄厚なる財力を以て世界を或程度まで動かし得るに過ぎぬ。

斯くの如く民族の消長又は、国語は誠に重大なる役割を演ずるものであり、言語は往々にして人種を超越するものであるから、国語統一による国民主義の昂揚を謀るのは現今其国の趨勢である。我が国に於ける五十年來の教育の普及と国語の統一、近来に於ける米国内の外国語による教育に対する禁遏、支那国民政府の取り来れる国家主義強調に歩調を合せたる国語統一、ドイツに於ける顕著なるドイツ語の普及統一によるドイツ主義の移植強化、その他何れの国と雖も国家の統一強化のために国語統一を謀らないものはない。満洲国に於ても、例外たることは許されないことである。然しながら国語統一による同化は言ふべくして頗る功を挙げ難いものであり、満洲国の如き複雑したる国家に於ては尚更功を急ぐことは戒しめねばならぬ。

然らば、満洲国に於ける国語の実情は如何であらうか。標準語問題に関しては建国早々国語研究会なるものを組織せんとしたが、五族協和の問題に触れるので成立に至らなかったが、事実上は公文書類は支那文（以下満文と称す）を主とし日訳を附するのを普通として居る。興安省の如き蒙古地方に於ては蒙文を主とし日文又は満文を従として居る。すべて實際上の便宜に従つて居る。近来は日満文共に使用され何れが主であるか不明な程である。政府公報の如きも従前は満文と日訳とを併載したのであるが、現在では日訳とせず、何れも正式なる国文といふことになっている。次に国民に対する国語教育を見るに、学校に於ける教授用語は日本語満洲語（支那語）とし、官庁用語布告文等も之に同じ。但し蒙古地方は蒙文及び日文である。即ち教育語公用語としては県制の地方に於ては日語満語、旗制の

地方に於ては日語蒙語，県制旗制併置の地方に於ては満，蒙語及び日語，白系露人に対しては露語日語を用ひしめる。朝鮮語は正課としては課さぬことになっている。右の如く学校に日本語を課し，日本語を教育語として用ひることは二三年來の趨勢であつて，以前は頗る困難を感じたとのことである。右の如き実状より見れば，教育の普及後に於ては何れの人種民族を問はず，母語以外に必ず日本語を解することとなるので，日本語は満洲国に於ける共通語，公用語となる筈である。

斯くして日本語が満洲国に於ける共通語公用語となるべきことは確實であるが，日本民族以外の民族にとっては容易ならぬ負担であり苦痛であることは事實である。これは日本の領土である台湾朝鮮に於ける国語普及の状況から見ても想像に難くはない。台湾及び朝鮮が我が統治下に入ってから既に三四十年を経過せる今日に於ても，国語常用者は総人口の三割，後者は僅かに一割に過ぎざる状態である。異民族にその常用語に非る国語を強制してその常用語たらしめるといふことは，殆んど不可能に属する。満洲民族が完全に漢民族に同化されたる如きは，満洲族が数に於て極めて少く，その文化が漢民族の文化に比し極めて低かつたため，斯くの如き完全同化は極めて稀な例である。其他に於ては国語の極端なる強制は多く失敗に終っている。露領ポーランド，独領ポーランドに於ては公用語は勿論，教育語としてもポーランド語の使用は一切許されなかったので，ポーランド人は常に治者に対し反抗し，露領ポーランドに於ては日露戦争を機に一大反乱を起し，学童のストライキも之に伴つたので，露国政府は已むを得ずポーランド語の私立学校を設立することを許可して之を鎮圧した。独領ポーランドに於てもその影響を受けて学童のストライキを起したが，目的は達せられなかった。しかしポーランド人は尚ほ独逸に対する反抗を止めず，人種的反感と相俟つて益々反独的となり，プロイセンの統治を離脱せんとする重大なる政治問題となつた。独逸もやむなくポーランド語の私立学校の設立を許可したが，間もなく一八七三年の教育令によって一切之を嚴禁した。露領，オーストリア領両ポーランドに於ては，漸次自

由を與へられたので、漸次自主独立に向って進んだのである。而して欧州大戦を機に何れも他民族の統治から脱して、ポーランド独立国を形成したのである。

仏領印度支那に於ては上流階級の永い間使用して居った漢文字を断然全廃し、之に代ふるにローマ字を以てした結果、印度支那に於ける上流社会の氣風を頽廢せしめたことは植民統治史上有名な事実であるが、学者の中にはこれを以て永い間慣れた象形文字より受くる心的感化を重視したためであると論じて居る者がある。此の議論は必ずしも人を承服せしむるものではないが、前に紹介した或人の言「得意に日本語を操る支那人は概して輕薄である」といふのと関連するところ有るが如くに思はれる。

次に我が新領土台湾朝鮮に於ける状態は如何であらうか。前述の如く兩地に於ける国語常用者は台湾は全人口の三割、朝鮮は壺割と称せられて居るが、兩地に於ける国語政策は相当嚴格で、此の事実を以て「威圧を以て民に臨み、民心の離反を助長するの愚を敢てしつつある驚くべき事実」として論をなす者がある（「新領土に於ける国語問題の重大性」、松岡正男、エコノミスト、昭和十二年七月一日号）。その論文の中に昭和十二年三月一日発行朝鮮日報（京城にて発行の朝鮮人の手に成る諺文新聞）社説「官公文および公職者の朝鮮語使用禁止」と題する一文を紹介して居る。その文に曰く、

「……国語を常用せざるものに対して朝鮮語の使用を禁止し、国語だけを使用せよといふのは、即ち現実を無視した処置と言はねばならぬ。……官公吏公職者に家族に向つてまで朝鮮語を使用するなどといふことは事実上実行不可能なことである。何となれば家庭には朝鮮語しか使用し得ない父母妻子があり、また社会には朝鮮語しか知らぬ友人知己がある、からである。日本語が国語である以上、国語を奨励しその普及を期することには異存はない。当然なことである。しかし国語を必ずしも一語に限ることは鉄則ではない。……日本語が国語になったからとて朝鮮語を極度に制限するのは不可である。人口二千三百万中十七%までが朝鮮語

を使用し、国語を理解するものは僅かに一割にも足らぬ現状で……国語使用を強要するは、実行不可能な無謀な処置である。(下略)、

又「台湾に於ては朝鮮に於て許可されて居る諺文新聞に相当する新聞の漢文欄を廃止し、台湾本島人の経営にかかる唯一の新聞「台湾新民報」が昨年六月一日から漢文欄を廃した。これは形式は自発的ではあるが事實は圧迫的である。国語常用者が人口の三割に充たぬ台湾に於て、漢文欄廃止を想法する必要が何処にあるか」と論じている。

誠に常用語に非る国語のみの使用を、特に家庭に於てすらも強要せられるといふことは苦痛であるに相違ない。前述のポーランドの例に見るも明らかなことで、一步誤れば国家の重大事を惹起するの虞あり、為政者の心すべきことである。即ち寛に過ぐれば漸次自主独立に向って進み、嚴に失すれば苦痛に堪えずして離反の道を辿ることとなる。

以上によって見るも満洲国の国語を複国語制とし、日本語を共通語とすることは満洲国の地位より見て適当なものと思惟されるが、日本語の強制には寛厳宜しきを得、嚴に失することは絶対に避けねばならぬ。他民族をして日本語常用者たらしむることは絶対に不可能事であつて、不可能事の実現を謀るべきではない。若し之を実現せんとすれば、長年月を費して圧倒的多数を占むる日本人を移植して経済的に他民族を駆逐するより外なく、斯くの如きは、是亦不可能事であり、縦ひ可能なりとするも東亜の安定を使命とする皇道精神に反するもので、断じて行ふべからざるものである。要之假すに長年月を以て、日本語を普及し、満洲国に包容せられる一切の民族をして、日本文化の真の理解者たらしめ、日本に信頼し、日本に親しみ、日本を愛し擁護する者たらしむれば足るのである。

東亞同文書院教授 鈴木擇郎的偽滿調查旅行

戰前上海東亞同文書院每年派遣畢業年級的學生去中國各地進行實地調查，他們寫的“大旅行日記”和“現地調查報告書”歷史上已經受到很高的評價。與此同時書院的教授們自己舉行了研究調查旅行，旅行之後他們也寫了“研究旅行日記”和“研究旅行報告書”。1937年夏天愛知大學中日大辭典的主編鈴木教授也舉行了研究調查旅行，其題目是“關於滿洲國的國語政策”。七七事件爆發的第二天鈴木從天津坐火車去了北平，在此地親眼看到了混亂當中的日本居留民社會，然後又訪問了偽滿。8月中旬第二次上海事變爆發的時候兒鈴木在朝鮮報紙上看到了上海的混亂狀態。因為鈴木沒辦法去上海回書院，所以先去日本找東京的東亞同文會打聽消息。當時上海東亞同文書院的領導已經作出決定讓所有的師生暫時回國避難。回國後鈴木寫了“關於滿洲國的國語政策”的報告。雖然鈴木所提出的國語政策的內容是溫和的，但是在七七事變後的混亂的局面下他還夢想着偽滿的長期的國語政策。